



# シーニックバイウェイ北海道 どうなん・追分シーニック バイウェイルート



佐藤 好子 (さとう よしこ)

どうなん・追分シーニックバイウェイルートコーディネーター  
(一社)北海道開発技術センター研究員

函館生まれ。2010年からどうなん・追分シーニックバイウェイのルートコーディネーターを担当。ルートの歴史・文化資源をはじめとする知識を深め、掘り起こし、つなぎ、新たな付加価値を探り、地域の人との交流を一義としながら地域づくりに関する企画提案や実践、支援などを行っている。

## しお 汐風薫るいにしへの道

「どうなん・追分シーニックバイウェイルート」は2008年5月に候補ルートになり15年12月に指定ルートに認定されました。道南西部エリアに位置し、離島奥尻島を含み、津軽海峡側に木古内町・知内町・福島町・松前町、日本海側に上ノ国町・江差町・乙部町・奥尻町、内陸側に厚沢部町と9町の広域で構成され、主要道路である国道228号・229号・227号沿道に各町の個性が展開しています。美しい朝日と夕日双方を海岸沿いに望める当ルートは「松前矢越道立自然公園」「檜山道立自然公園」から成る自然の壮観だけではなく、北海道の和人文化発祥の地域として、また松前藩を中心とした様々な歴史資源と、江差追分をはじめとする文化資源、そして海と山の豊富な食資源があります。いにしへの道に映る温故知新への景色が活動の核となっているのが特長的なルートです。

### 歴史を掘り起こし観光空間づくり

「勝海舟」や「福澤諭吉」を日本人で知らない人は少数ですが、彼らとともに航海し日本歴史上屈指の功績を持つ船「咸臨丸」が、木古内町サラキ岬沖で座礁し最後を遂げたのはあまり知られてはいない事です。当ルートの活動団体「咸臨丸とサラキ岬に夢みる会」「木古内町観光協会」「木古内商工会」では、史実を調べオランダで作られた「咸臨丸」にちなみ、サラキ岬にチューリップ球根を約80種類5万個植え、それらが咲く5月にチューリップフェアを開催する、観光交流拠点づくりの活動を進めてきました。

その実績が認められ、2010年度に国土交通省の「手づくり郷土賞」を受賞しています。郷土の歴史遺産である資源を最大限に活かし、観光や産業へ繋げて一人一人が誇りうる地域性を高めていくことが大切です。ルートの活動計画の中でも「歴史の道掘り起こしプロジェクト」として歴史の掘り起こしによる観光空間づくりを推進し、毎年実施している学習会等を通して研鑽を重ねています。



木古内町 サラキ岬  
チューリップフェア

## 史実や文化を学びながら地域づくり

この地域の大きな存在は松前城であり、北海道唯一の城下町の歴史・文化の独自性を持っています。ルートの活動団体「福島町千軒地域活性化実行委員会」「福島町観光協会」で取り組んでいる「殿様街道探訪ウォーク」は毎年春と秋、2回開催されます。松前の殿様が参道として切り開いた旧道を毎回違ったテーマの史実を学びながら、自然を楽しみ散策し、茶屋跡で憩い、千軒特産のそばを堪能し、福島大神宮の松前神楽の奏上を嗜むというものです。単なる山登りではなく、そこに歴史・景観・食・文化があり相互作用による魅力を楽しめます。この活動のそれぞれの分野に魅了されたりピーターがおり、また、それぞれが地域づくりとしても取り組んでいます。

この活動は2009年ベストシーニックバイウェイズプロジェクトで審査員特別賞を頂きました。ルートには面白い古道がほかにもあり、地域づくりの基となるよう、活動を進めており、ルート活動計画である「どうなんフットパス・ロードプロジェクト」や「おもてなしガイドプロジェクト」にも繋げています。

## 街並を活かした景観づくり

「北前船」の文化を色濃く残している江差町では、活動団体の「歴まち商店街協同組合」「江差商工会」「江差観光コンベンション協会」「江差追分会」により「いにしえ街道」商店街の街並み景観を活かした多彩な取組を行っています。5月の春イベント花嫁行列は、江差追分で鍛えた唄い手が長持唄を響かせ、栄華時を思わせる古式ゆかしい厳かな行列で、「姥神大神宮前」で行われる餅つき囃子と餅まきの賑わいにも華やぎがあり、見物客が増加傾向にあります。2月から4月にかけては街道をあげてひな人形を飾ります。第5回を迎えた2016年は約180組が店先や玄関口に飾られ、白



福島町 殿様街道探訪ウォーク

い雪の積もる中、家窓から赤い毛氈が見える通りは街道全体が美術館のような光景です。

夏には幻想的にキャンドルの灯りを楽しむ「ガイアナイト&どうなん追分シーニックdeナイト」を開催。古い土蔵を再生し、コミュニティカフェにしたり、写真を展示したり、店舗として活用し、その蔵を巡る探訪ガイドウォークをしたり、これら一連の取組は2014年度「手づくり郷土賞」に輝きました。

そして「北前船」をご縁として、青森津軽、下北や秋田との広域交流の連携ができています。ルート活動計画の「おもてなしガイド」や「歴史の道掘り起こし」「どうなんフットパスロード」プロジェクトは元より、「教育体験観光呼び込みプロジェクト」での交流を進めています。

## 「ひと」と「みち」がつなぐ地域力再生へのチャレンジ

指定ルートに認定され、北海道新幹線開業を迎え、9町それぞれが独特の個性を輝かせながら一丸となり地域力の再生を目指しています。さらに「函館・大沼・噴火湾ルート」をはじめとするほかのシーニックルートと一体感を感じる活動、青森圏津軽や下北との交流（ひと）が、シーニック・新幹線（みち）により絆を深め、繋がり、地域力のエネルギーとなっています。

青森市から津軽半島の龍飛崎までを「あおもり松前街道」といいます。北海道新幹線の経路はまさに松前藩の殿様が参道として通った道なのです。「みち」は時代を飛び越え多くの「ひと」を繋げてきました。そこにはいにしえより変わらない勝景、群青の海原、濃緑の樹木、太陽が昇り沈む様があり、そして未来へ「みち」は続いていきます。心に映るこの地の景観を守り、訪れる人たちにたくさんの笑顔があふれるよう、ルートみんなで豊かな志を繋ぐ活動の歩みを進めていきます。



江差町 いにしえ街道江差北前のひな語り